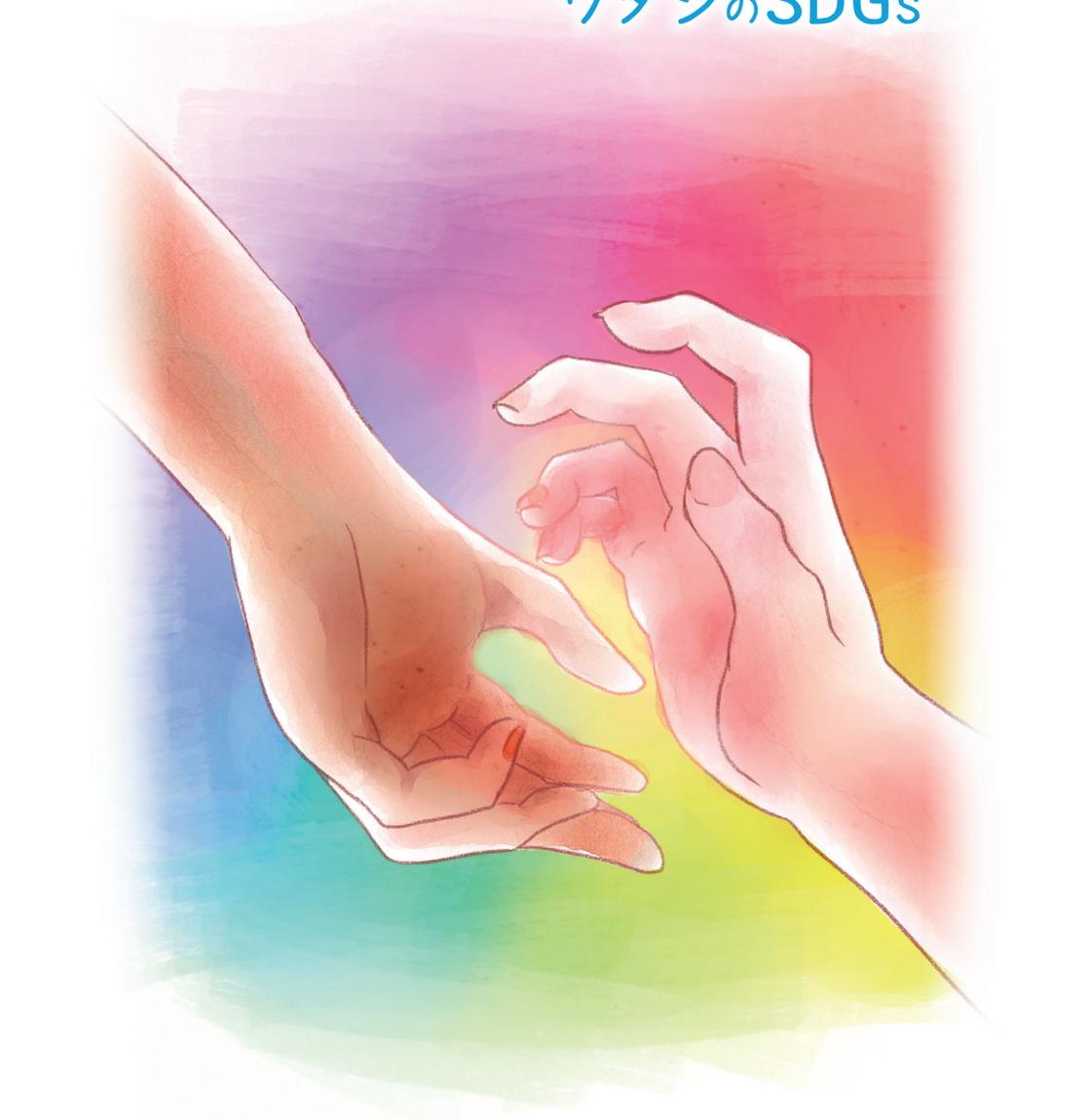


白 色 白 光

びやくしきびやっこう 第21号

ワタシのSDGs



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



SDGsロゴと17のSDGsアイコン (P2、P25参照)



エルサレム新市街でパンを買うイスラエル兵士 (P29参照)

人権学習誌『白色白光』びやくくしきびやくこう 第21号 ワタシのSDGs

なぜ、SDGsに取り組むの？ 杉岡孝紀 2

《座談会》共に学び、共に育つ 只友景士 魚見航大 7

宮崎雅大 土屋龍心
渡久山盛陽

「依存症」じゃ、ダメ、絶対！ 市川岳仁 18

身近なものを見つめなおすことからはじめよう 中平了悟 24

パンと銃とーエルサレムで感じたメディアが伝えないリアルー 由良捺美 29

共是凡夫

今もなくなならない部落問題・同和問題 妻木進吾 32

「女子力」って何？ 金子裕一郎 34

「見えない」いいない」ではないセクシュアルマイノリティ 吉本圭佑 35

外国人も社会の一員 チャプル ジュリアン 36

「社会的平等」を否定するヘイト・スピーチ 金 尚均 37

子どもに対する厳しいしつけや指導 林 美輝 38

介護が必要でも、その人らしく生活する権利を 高松智画 39

障がいのある人と共に生きるために 森田喜治 40

人権に関する基本方針・性のあり方の多様性に関する基本指針 42

なぜ、SDGsに 取り組むの？

農学部教授・仏教の思想 杉岡孝紀

■SDGsとは

最近、SDGsという言葉をよく耳にします。授業で学んだという人もいるかも知れませんが、言葉は知っているけれども詳しい内容までは知らないという人が多いように思います。そこで、最初にSDGsとは何か、簡単にまとめておきましょう。

SDGsとは、Sustainable Development Goalsの略で、日本では一般的に「持続可能な開発目標」と訳されています。SDGsは、2015年9月に国連サミットで世界のリーダーが集まり、この地球に住む私たちが共通して直面している課題、つまり貧困、人権、環境、平和等のさまざまな問題の解決に向けて採択された17の目標と169のターゲットをい

います。この目標は、2016年から2030年までの15年間に達成することを目指すもので、言ってみれば、世界を変えるための壮大な目標なのです。

それでは次に、具体的に17の目標を見てみましょう。(表紙裏参照) 国際連合広報センターのHPには、17の目標がカラーのアイコンで記されています。順に、「1. 貧困をなくそう」、「2. 飢餓をゼロに」、「3. すべての人に健康と福祉を」、「4. 質の高い教育をみんなに」、「5. ジェンダー平等を實現しよう」、「6. 安全な水とトイレを世界中に」、「7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「8. 働きがいも経済成長も」、「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」、「10. 人や国の不平等をなくそう」、「11. 住み続けられるまちづくりを」、「12. つくる責任つかう責任」、「13. 気候変動に具体的な対策を」、「14. 海の豊かさを守ろう」、「15. 陸の豊かさを守ろう」、「16. 平和と公平をすべての人に」、「17. パートナリーシップで目標達成を」です。

(国際連合広報センターHP

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/参照)

17の目標は、一つひとつが重要な課題ですが、いずれも独立した問題ではなくて相互に関係しています。例えば、貧困の問題は単に収入や資産がないという問題ではありません。

それは、飢餓や栄養不良、社会的差別や教育機会の喪失といった、さまざまな形を取って現れ出てくる問題です。ですから、貧困をなくすことは飢餓の撲滅と同時に考えなければならぬ問題でもあり、また平和と公平が確保されなければ実現できない目標でもあるわけです。どれも総合的に取り組むことが必要な目標なのです。

でも、こうした国連で採択された壮大な目標と聞くと、とても自分には縁遠くて、国家レベルの、あるいは一部の専門家だけに関わることの可能な課題のように思うかも知れません。でも、決してそうではありません。一つひとつが、身近な問題と直結しています。ですから、一人一人が自らの問題として取り組むことが求められているのです。国際連合広報センターHPには、私たちにもできるアクションが具体例を挙げて紹介されています。「使っていない照明は消そう」、「印刷はなるべくしないで紙を節約しよう」、「買い物はマイバッグを持参しよう」、「詰め替え可能なボトルやコーヒークップを使おう」など、こうした毎日の暮らしの中で私たちに実践できることが紹介されています。取り組まないからといって、SDGsには法的な拘束力はありません。けれども、これは世界レベルの社会的契約だということを忘れてはなりません。

したがって、同然のことながら、私たち龍谷大学の構成員（学生・教員・職員）も、一人一人が主役となって取り組む目

標でもあるわけです。

■SDGsの理念

さて、「持続可能な開発目標（SDGs）」への取り組みは、すでに世界のさまざまな国や地域で始まっていますが、一方で世界には正義の名のもとに排他的な傾向が広がり、対立と分裂への動きが深刻化していることも事実です。そこで、SDGsの理念とは何か、ここで確認しておきたいと思います。

「No one will be left behind — 誰一人取り残さない（置き去りにしない）」——。これがSDGsの基本理念です。国連広報センター所長の根本かおる氏は、宗教専門誌『中外日報』の中で、「人々の心の救済を目指し、時には危機の最前線に立つて被災者への支援を提供し、人々の尊厳を守るための努力を重ねる宗教関係者の方々には特に、「誰一人置き去りにしない」を掲げるSDGsの担い手になっていただきたいと強く願っています……「誰一人置き去りにしない」という人権に根差したSDGsの考え方は、難民をはじめとする取り残されがちな人々を包摂するものとして強調したいポイントです。昨今広がりつつある「異なるもの」への差別や不寛容に対して反対の声を上げ、移住のプラスの側面について語り、メディアや政策立案者に移住という課題にバランスの取れた対応を求めなければなりません。宗教界の方々には是非寛容の精神を地域の方々にしつかり根付かせることに貢献してい

ただければと願っています」(2018年3月30日付)と書いておられます。

「誰一人置き去りにしない」という考え方は、「取り残されがちな人々を包摂するもの」だという点は最も注意したいところだと思います。私たちは、日常生活の中で常に他者と関わらなければなりません。ここでいう他者とは、単なる他人のことではなく、自分とは異なる考え方や価値観、文化・宗教をもった人々のことです。古来、日本には「和」を大切にする文化があります。私たちが「他者を受け入れる」という場合、他者を自分たちの世界の「和」に取り込もうとする傾向があるように思います。けれども、自分の物差しでもって他者をつながっていきません。暴力というのは、人々が持っている潜在的な実現可能性を奪う不当な力のことです。それは、戦争・紛争・テロ・虐待といった直接的な暴力だけを指すものではありません。社会構造に組み込まれた差別構造も暴力です。さらに、それらを正当化する教えも暴力に外なりません(「ガルトウングの平和理論」法律文化社、2006年参照)。

現代の課題は、この「他者」を正しく理解するという問題に集約されます。SDGsの17の目標の根底には、「和」から除外されがちな他者を正しく理解するという人権の問題があるのだと考えられるのです。そうすると、「誰一人取り残さない(置き去りにしない)」ということを実践することは、

とても難しいことだといえます。それでは、どうすれば難しい問題に対して行動に移すことが可能になるのでしょうか。実は、そのことを考えることも、SDGsの取り組みだと言わなければなりません。

■SDGsの行動原理と龍谷大学の建学の精神

幸いに、龍谷大学にはSDGsの行動原理となるヒントがあります。建学の精神です。大学のHP「About 龍谷大学について」を見てみましょう。そこには最初に、「龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません」と記されています。
(<https://www.ryukoku.ac.jp/about/outline/sprith.html>参照)

誓願(せいがん)というのは、仏がさとる前の菩薩の時にもった大いなる願いのことです。本願ともいいます。その願いは、自己中心的な考え方や生き方に基づいた願いではありません。それは、他者のいたみや悲しみ、そして苦悩を自分ものとして抱え込むことのできる、慈悲の心に基づいた清らかな願いです。言い換えると、菩薩というのは人々が苦悩すれば、自分も苦悩し、人々が泣けば共に泣く、そのような心をもった方であって、すべてのいのちあるものの苦悩を救うことが、そのまま自分の悟りだと考えるのです。それは、宮沢賢治が『農民芸術概論綱要』の序論に、「世界がぜんた

い幸福にならない。うちは個人の幸福はあり得ない」(『宮沢賢治全集(10)』ちくま文庫、1995年。あるいは電子図書館『青空文庫』を参照)と書いた心のあり方です。もちろん、そうした菩薩と同じ心をもつことは、到底私たちにはできません。できないのですが、それでも私も仏の願いをかけられている一人なのだと思われかされる時、人は自分の愚かさを知らされ、また同時に、菩薩の願いがあるべき人間の高い理想として掲げ、その願いかなうような生き方を目指す人間へと、少しづつではあるのですが成長していくことになるのです。

第13代学長の信楽峻磨先生は、龍谷大学の建学の精神とは大乘菩薩道の精神であって、それは「自己を後にして他者に尽くす心である。自己の存在が、社会の進展のため、世界人類の幸福のために、いかなる意義をもつかを厳しく問いつづけるような生きざま、たとえそのことが、どれほど僅少であろうとも、つねにそのことを自己自身に問いつづけて生きてゆく、そういう人生の姿勢を教えるものである」(『りゅうこくブックス(66)』巻頭言、龍谷大学宗教部、1994年)と示されています。龍谷大学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学びながら、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成する大学です。私は、SDGsの理念は龍谷大学の建学の精神と重なるものと受けとめています。答えを導き出すことが困難な問いに直面した時、私たちは建学の精神に立ち返

って考えることが大切だと思います。

■龍谷大学農学部での取り組みの一例

さて、SDGsの取り組みは、日本では自治体、企業、宗教団体、学校・大学などで始まっています。自治体では、滋賀県が全国に先駆けて2017年にSDGsを県政に取り込むことを宣言しました。そして、経済界や大学などとパートナーシップを拡大させて多様な取り組みを行っています。龍谷大学では、法学部が2018年6月27日に「教育で私たちの世界を変える」というSDGs宣言をしました。その後、本学でもいろいろいるところで取り組みへの機運が高まっています。ここでは、農学部(資源生物科学科)の取り組みについて紹介したいと思います。

建学の精神に基づいて設置された農学部の特徴は、私たちの(へのち)を育むために不可欠な「食」と、それを支え、また人びとの豊かな暮らしに貢献する「農」という二つの観点から、農作物の「生産(栽培・収穫)」から「加工」「流通」「消費」「再生」に至る一連のサイクル(食の循環)を多角的な方法で実践的に学習・研究することができることにあります。SDGsと農学との関わりといえば、特に「2. 飢餓をゼロに」という目標が目立ちますが、食の循環という視点から見れば、「3. すべての人に健康と福祉を」、「7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「9. 産業と技術革

新の基盤をつくらう」、「14. 海の豊かさを守らう」、「15. 陸の豊かさも守らう」等とも関連します。

農学部には四つの学科がありますが、例えば資源生物学科では、食糧の安定供給が地球規模で厳しい現状に対して、周辺環境への負荷を抑えながら、化石エネルギーの投入量を少なくした持続的な作物生産体系の確立を目指す学習、さらには研究がなされています。これは、「2. 飢餓をゼロに」のターゲットの一つである、「2030年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水及びその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食料生産システムを確保し、強靱な農業を実践する」に合致しています。

そして、同学科の大門弘幸先生の研究室では具体的に、滋賀県とのSDGsの達成を目指す事業の一貫として、「水田の高度利用と付加価値を意識した地域特産農作物生産へのチャレンジ」という研究課題をスタートさせています。日本では水田が農耕地の54%の約250万haを占めていますが、2017年度の水稲作付面積は146万haまで減少しているようです。大門先生によれば、水稲が基幹作物である滋賀県等で農業の活性化を通して地域を発展させていくためには水田を、畑作物を生産するために利用の形態を変えた水田転換畑で安定的に生産することが必要になっていきます。けれど



農学部資源生物学科（大門研究室）



も、持続安定的に生産ができる作物は多くはないようです。そこで、大門研究室では滋賀県の農耕地を研究フィールドとして、水田の農耕地としての持続性を転換畑利用という視点から探り、SDGsを背景にした新たな地域特産作物の可能性に取り組み、さらに生産物の商品化も考えているとのことです。

これは農学部の取り組みの一例ですが、龍谷大学ではこれからさらに他の機関との連携も含め、さまざまな取り組みがなされていくのだと思います。

あなたも一緒にできることから始めてみましょう。ソファで寝たままでもできることがあるのですから。

座談会

只友 景士 (ただとも・けいし)
政策学部教授

魚見 航大 (うおみ・こうた)
政策学部出身
(株)革靴をはいた猫 所属

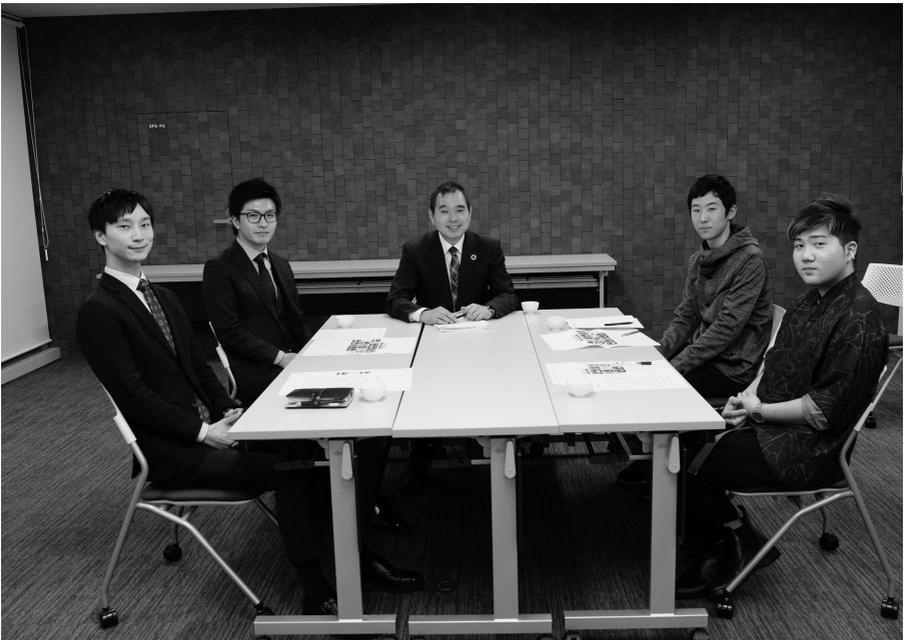
共に学び、共に育つ

人の可能性を引き出す最前線の現場から

宮崎 雅大 (みやざき・まさひろ)
政策学部出身
(株)革靴をはいた猫 所属

土屋 龍心 (つちや・りゅううん)
政策学部2年生

渡久山 盛陽 (とくやま・せいや)
政策学部1年生



写真右から渡久山さん、土屋さん、只友さん、魚見さん、宮崎さん

只友 政策学部の只友景士です。2011年4月に龍谷大学政策学部創設時に滋賀大学から移籍してきました。この4月で9年目に入ります。私自身岡山県の農村部の出身なので、今回のテーマのSDGsや農村問題に関心があります。

まずは、お一人おひとりから自己紹介ただけませんか。

魚見 2017年3月に龍谷大学の政策学部を卒業した魚見航大と申します。



只友教授

現在「(株)革靴をはいた猫」という会社を経営しています。

生まれは広島なのですが、親が転勤族で、三重県で中学、高校と長くすごしたので、違った環境のところへと、龍大にきました。で、深草キャンパスの障がいのある人と共に学び合う「カフェ樹林」で活動をしていて、そこでのお会いから今の仕事につながっています。

宮崎 はじめまして。宮崎雅大と申します。魚見と同じ2017年3月、政策学部の出身です。魚見と共に「革靴をはいた猫」を立ち上げ、副社長として働いています。

愛媛県の四国中央市出身で、同じく「カフェ樹林」での活動に傾倒した結果、こういうことになりました(笑)。

土屋 政策学部2年生の土屋龍心です。Ryu・SEI GAPの「まなサポ+1」チームの代表をしています。Ryu・SEI GAPとは「龍谷大学政策学部グローバルアクションプログラム」の略ですが、学部開設当初から始まったと聞いています。その中のひとつのプログラムである「まなサポ+1」は、大学周辺の伏見区の子どもを対象として、居場所作りを行っていきます。僕は自然が豊かな地域で育つてきて、今も自然が大好きです。そんな子どもの頃からの経験を生かしたいと、今の活動をしています。

渡久山 政策学部1年生の渡久山盛陽です。土屋さんと同じRyu・SEI GAPで活動をしています。福岡で生まれて、東京にちよつといて、以後はずっと沖縄で育ちました。

居場所作りにたずさわろうとしたきっかけは、高校生のとき沖縄県からの留学生派遣でカンボジアに行ったときの経験からです。現地でストリートチルドレンとかの貧困の状況などを見させていただいて、こういう問題を勉強し、解決できるような人間になろうと政策学部に入學し、Ryu・SEI GAPの活動をするようになりました。

きっかけは「カフェ樹林」だった

只友 それでは次に、それぞれの活動のあらましを話していただけますか。

魚見 「革靴をはいた猫」という会社では、靴磨き事業を行っています。ただの靴磨きではなく、出張型の靴磨きサービスです。例えば企業にお伺いして、会議のときなどにみなさんの靴をお預かりして、会議が終わるまでにきれいに磨き、お返しするというサービスです。昨年、市内の御池通りに店舗を構えて、今はお店と出張サービスを軸に事業を行っています。私と宮崎の他に、従業員2名とアルバイトの学生がスタッフとして働いています。

原点は、学生時代の「カフェ樹林」です。ここはB型の事業所なんです。渡久山 障がい者のための就労継続支援事業のB型。

魚見 そうそう。10年ほど前、障がいをもつ人と健常者が、共に活躍できる

「ともいき」の場所を作ろうということからスタートしたと聞いています。

当初、障がいのある人に時間を決めて働いてもらい、終われば帰っていくという普通のカフェでしたが、私たちの2年先輩が当時のカフェの店長さんと協力して、共に学び分かちあえる場所にしていこうと、「チーム・ノーマライゼーション」という団体を作ることから、活動が始まったのです。活動とは、実際にカフェの中で一緒に働きながら、互いに話し合ってコミュニケーションを深めていくというものです。

ここで感じたのは自分が入った初日、何もわからなくてアタフタしている、他のスタッフに仕事についていろいろと教えてもらうのですが、アルバイト初日の自分の時給より他のスタッフのほうが低かったのですが、現在はさまざまな方の努力もあって、学生と同じく最低賃金以上の時給が支払われています。

「カフェ樹林」では、メンバーたち

の「学生と一緒に働くのが楽しい」だとか、「大学に行きたかった」という話などを聞いたりして、カフェの店長さんが本当に共に学び合える場所を作っていこうと、僕たちも一緒に活動していくことになりました。

そのときに、カフェでの飲食業務に加え、農業と職人コースという、学んだことを実践する場を作ろうということになり、その中から靴磨きがいいんじゃないかと。そこで、カフェを営業しながら私は靴磨きのスキルを学び、一番最初は、大学の教授会でサービスをさせてもらいました。そのあたりからメンバーたちの成長と、一緒にやっていける可能性を実感し、大学から出て企業にお願ひに行ったりしている中で、事業化したいと会社を立ち上げたのです。

只友 魚見さんは2年生の秋から活動されたそうですが、そのきっかけは？

魚見 僕はRyu・SEI G A Pの「伏見わっしょい新党」で活動をして

魚見さん



いました。農家さんの地産地消を応援する中で、学内でも知ってもらおうと加工品を作り、その品物をカフェ樹林で売っていただけませんかとお願います。と、カフェ樹林の店長さんがすごく協力してくださって、その延長でカフェを盛り上げるのも手伝うことになったのがきっかけです。その時まで、「カフェ樹林」は障がいのある人のB型事業所であることを、知りませんでした。

只友 そうだったのですか。

宮崎 西尾さんという僕と魚見の共通の友人が、チーム「ノーマライゼーション」で活動していて、カフェでのイベントをやったり、いろんなサークルとコラボしていくためにはもっと人材が必要だと、メンバーを募ったのです。そのとき、西尾さんからの誘いをうけ、僕も参加しました。

只友 魚見君と同じように、障がいを
持つ人が働いているということは？

宮崎 僕も知りませんでした。

プラス1の居場所作り

只友 土屋さんの活動は、どのような
ものですか。

土屋 「まなサポ+1」は、この地域
に貧困の子がいて、そうでない子との
学習格差が出ているので、将来、高校
や大学進学に向けてそうした不平等、
格差をなくすために始まった活動です。

最初は小学生が対象でしたが、「貧

困」ということが地域性によるもので

はなくならない今、勉強だけでいい
のかと考えたとき、子どもの頃にいろ
んな経験をして、その経験によって将
来の展望を開いてもらうことができれ
ばと、勉強に加えて居場所作りをして
います。一緒にごはんを作ったりだと
か、勉強以外に何かを、これを僕らは
「プラス1活動」と呼んでいます。対

象は中学生でしたが、それじゃ遅いと
小学生向けの活動もアプローチしてい
るところです。また、高校生もいます。
中学校を卒業したら、それぞれ自立し
てもらおうと考えていたのですが、高
校生になったとしても貧困は解決する
わけでもなく、高校生になっても居場
所にきてよと、やっています。

只友 それは、すごいね。

土屋 最近の話ですが、家族でのトラ
ブルがあって、そういうのは友達にも
相談できないので話を聞いたら、両親
とケンカをし、それからどうしたらいい
かわからなくなったと。こんなとき、

子どもたちのために、何でも話して相談できるアットホームな空間作りが必要だと痛感しました。

宮崎 土屋さん、貧困って何が貧しいのだと思いますか。単にこれは、学習能力の差だけじゃないような気がしますが。

土屋 最初は金銭的な貧しさだけだと思っていたのですが、実際に子どもたちに接してみると、言葉使いが荒い子



宮崎さん

ういう言葉はだめだよ」と言うのと、「なんであかんの」と返ってくる。その子は一人親で、親と一緒にいるのは夜だけです。家庭での言葉の教育が行き届いていないのです。そういう経験が少ない子たちも「貧困」と位置づけていないんじゃないかと、居場所作りを始めたのです。

宮崎 そういう経験をすると、何が豊かに？

土屋 思考能力とか想像力でしようか。例えば紙一枚を見たとき、これは折り紙にするためだけではなく、字を書いてメッセージを伝えるために使うものでもあると、そういう連想……。もの一つとってもそれを活かせる力なんかもあって、そんなものも、豊かさのひとつだと考えています。

宮崎 その豊かさが持てなかったり、持ち方がわからなかったりして、人の関わりも持てなくなってしまう、居場所がなくなっていく。そこを、豊かにしよう。

土屋 ええ、そうです。

只友 宮崎さんの何が貧困なのかって、すごくいい質問ですね。貧しいって何だろうかというところ、普通は、お金や預金がないのが貧しいと。でも、本当に貧しいというのは何かというの、すごく大事な問いかけだと思います。ものを活かす力や知恵が欠いたための貧しさもあるということでしょうか。

僕は今朝まで福知山に行っていました、たしかに大都市のような経済的な活発さは乏しいかもしれないけれど、そこには豊かな農山村の暮らしがあるというようなことを考えると、貧しいとはいったいどういうことなのかが問われています。

共に学び合う、共に育つ

土屋 「カフェ樹林」って、共に学び合える場所だとおっしゃっていました。みなさんは何を共に学び合っていますか。



られるのですか。

魚見 これまでのお話を聞いていて、「体験」というのがキーワードかなと思います。障がいのある人は出会う人とかが限られていて、そんな中で大学生と出会う。僕らもそのカフェでいろんなメンバーと出会って、感じることもたくさんありましたし、障がいのあるメンバーにやってあげるのではなく、一緒にやってみようかと働きかけてきました。そして、靴磨きだとか農

業体験、飲食というものを共通のツールとして取り組んできました。実際にそういうふうに進めていくと、ああこういうことが学びになるのかとか、一緒にチャレンジすることによって見えってきたことや学んだことが、たくさんあります。

例えば最初、車で切符を買うのがむづかしかったメンバーがいました。出張靴磨きに大阪へ向かったとき、切符が買えないので、まわりの人間がサポートしていたのですが、そこではじめて、自分で切符を買うようになりたいたと思ったり、お金の使い方をおぼえたり。今まで20何年間できなかったことがはじめてできるようになり、今ではどこに集合しようが、自分で切符を買って、どこへでも行けるようになりました。

そういうことを経験し、変わっていく姿を間近に見ていて、挑戦する姿勢だとか、自分からもっとやってみたいと言ったり、いくつも気付かされたこ

とがありました。それが学び合いかなと、僕は思います。

只友 今、人を変えようとおっしゃいましたが、それは「障がい」って、何だろうかということに関わってきますね。さっきの「貧困」って何なのと同じように、人を変ええるというのは、「障がい」を克服したと言っているのでしょうか。

魚見 僕は大学4年生のとき靴磨きを教えていたのですが、最初は「障がい」って、できないことだと思っていました。例えば切符を買えないメンバーがいて、じゃ切符は僕が買うので靴磨きだけをしてとお願いしていました。でもこの切符を買うというサポートは、結局はメンバーの可能性をさまたげていました。一緒にやっていく中でこれもやりたい、あれもやりたいという意欲が出てきて、時間はかかるけれども、できるようになったことがたくさんあるなど、改めて驚かされました。

僕もまだ、出会ったメンバーは少な

いのですが、挑戦すればできることが
どんどん増えていく。そのような自分
から取り組んでいく姿勢がなかったら、
私たちの会社の事業化は無理でした。

只友 なるほど。「障がい」というの
はできないのではなくて、時間がかか
るかも知れないけれど、できるように
なる。心に意欲の灯火がちゃんとつけ
ば、どんな可能性がひろがっていく。
魚見 そうですね。

只友 それを一緒にやる中で、共に学



渡久山さん

び合う、共に育ち合う世界が広がって
いく。

宮崎 福祉の現場はさまざまなので
が、自分がこういうふうになりたいと
思っても、すぐ見限っちゃうのです。
そういうことがよくあります。例えば、
包丁を持たせるとケガをするので危な
いから、包丁をうまく使える人だけに
やらせる。でも、しっかりと時間をかけ
て、こうやったらなぜ危ないのかとい
うことがわかるまで、個人差はあるも
ののちゃんとわかるまで、本人が包丁
を使って料理をしたと思うまで、じ
つくりとサポートする。それを、「あ
なたは包丁が苦手だから、やらないで
良い」と言ってしまう可能性の芽を摘
んでしまう。それでは本当にもつたい
ないと思います。本人ができるように
なるまで、しっかりと向き合い、つき
合っていく必要がありますね。そうい
う話や、みんな生まれも育った環境も
違って、人間として同じなのだと、
人間として大事にしたいことは何だろ

うと話し合って、みんなが学び合う。
只友 人間として同じですよ。しっ
かり向き合い、じっくり付き合うこと
が人の可能性を引き出す。じっくり付
き合ってもらえなくて可能性が引き出
せていないことも多いでしょうね。

宮崎 障がいがあるからできないのだ
という見限り方、これはやっぱりもつ
たいないですね。さっきの話のように、
人間なのだから自分が本当にしたいこ
とを、どうやったらできるようになる
のか、そこに目を向けないと、人間と
して生まれた意味がないと、そういう
話し合いを通して、じゃ苦手なことを
やろうかと、何ヶ月もかけて時計の時
間を読む練習をするだとか、漢字をお
ぼえるだとか。だから今や、一人でお
店をまかせられるレベルになっている
し、一緒にチャレンジすることによっ
て、共にリスクを背負うことが学び合
うということだと思います。

只友 今、お二人の障がい観が変わっ
たというお話を聞かせてもらって、い

いなと思いました。

ところで話は脱線しますが、私が滋賀大学にいたとき、滋賀県内の障がい者の就労状況を調べていたことがありました。滋賀県中小企業家同友会では、障がいの雇用を増やすことを自分たちの目標として取り組まれているそうです。そこで伺った話によると、障がい者雇用が増えない最大の理由は、社長が自分の会社にはどんな仕事があるかを、ほとんど把握していなかったからだということでした。ちゃんと把握することによって、この仕事はあの人のやってもらおうと、障がい者雇用を生み出すことができます。うちの会社では障がい者雇用は無理だというのは、仕事を把握していないからなのだと思います。

それともうひとつ。日本理化学工業の会長さんの講演を伺ったときのことです。日本理化学工業では、工場の生産プロセスそのものが、障がい者が働ける現場に作りかえられているとのこ

とでした。経営学の先生がその話を聞いて、「その生産工程の工夫で、おそらく生産効率がすごくよくなり、コスト的にもイノベーションが起きたに違いない」とおっしゃってました。

弱さを見せ合う場こそ

宮崎 ところで、土屋さんたちが一緒に関わる中で、この活動を通じて、皆さんが変わっていったこと、活動に関わったみんなに起きた変化などありませんか？

土屋 何にでも否定的な子がいて、その子が中学校を卒業して高校生になってから、すごく勉強をするようになった。クラスの人に負けたくないと思うようになり、それまでテストで40〜50点くらいだったのが、90点台になった。

宮崎 一方で、そんなに向上したのですか。

土屋 勉強以外のところで、みんなと

うちとけて関係性がよくなったことと、僕たちも全力で取り組んでいたの、その思いが実を結んだのかも知れませんが。

只友 全力で取り組んだ。そこには、苦労もあると思いますが。

土屋 ええ、いろいろありました。一緒に話していると、急に不機嫌になって外に出て行ったので連れ戻したりとか、生徒同士のケンカも大変でした。でも、そういうことも逆にいいのかなと思いました。

魚見 さつき言っていた経験ですね。

土屋 そうです。

宮崎 ところで、まなサポ＋1のメンバーは何人ですか。

土屋 7人です。

宮崎 その7人がぶつかり合うことも、土屋 けっこうあります。外に向けた活動として、まち歩きなんかいいじゃないと提案すると、まち歩きより運動

会がいいと、意見がわかれたり。

宮崎 ぶつかり合ったあとは？

土屋 とにかく話し合って、みんなが納得する形で収まります。やっぱり、心の中で思っていることを全部はき出すと、お互いがすっきりして納得する。

只友 子どもたちとの付き合いで苦労したとも聞きましたが、「殺すぞ」などと、面と向かつてののしられたこともあったとか、おそらく「ちょっと向こうへ行つといて」という程度のもつりです、そんな言葉になったのだと思いますが、色んな子どもがきたりするでしょう。そういう多様な子どもたちと一緒にやっていて、君たち自身も成長したと思いますが、そうした居場所作りの中で、うれしいこともあるよね。

土屋 ええ、毎週きてくれたときなど、よかったと思いますね。

只友 きてくれたことが。
土屋 はい。台風で暴風警報が出たときでも、きてくれた。そんなときに限って、大勢きてくれる(笑)。

只友 学校は休みだし。
土屋 暴風で危ないのに、それでもき

てくれる。やっついてよかったと思えました。

渡久山 こちらも弱さを見せると、向こうも見せてくれる。そして、どうでもいいかわいもない話を、照れながらもしてくる。仲のいい友達や親にも話せないことを、ちょっと年が離れたお兄ちゃん、お姉ちゃんに話してくれる。どうでもいい話を10分くらいして、それで帰っていく子がいたり。

只友 どうでもいいかわいもない話とは？

渡久山 ボーイフレンドやガールフレンドの話とか。

只友 どうでもいい話じゃないね。

渡久山 はい。どうでもいい話ではないですね。そんな話ができる居場所作りの活動につながっていてよかったと、何度も実感しました。

只友 おしゃべりすることが、その子にとつてかけがいのないことなのですよ。それと、大学生のお兄さんお姉さんが、子どもたちの前で弱さを見せる。

それって、大事なことだと思えます。弱さというか、皆さん自身の人間らしさかな。日本の学校では、先生は弱さを見せずに強くないとだめだ、先生の言うことをよく聞けよという一方的な世界ですから、今の渡久山さんが話してくれたのは、すごく素敵な話ですね。

渡久山 いつも、問題を子どもたちと一緒に考えているのですよ。これどうやって解くのと。僕らは学校の先生ではないから、わからない問題もたくさんあります。また、どうすればこのマナサポの活動がよくなるかって、きてくれているみんなと一緒に考えたりするので、その子たちも私たちのためにがんばろうと思ってくれます。勉強するよと変わってくれて、専門学校に行った高校生もいて、うれしくなります。

宮崎 弱さを見せ合うから同じ人間同士だと思ふ。逆に弱さがなかなか見えてこない人って、すごく近寄りたいですね。弱さを見せたから、相手はほつとする。思っていたことが言えたか

ら、勉強に集中できるようになったのでしよう。

只友 まなサポ＋1の活動というのは、学校でも塾でもない。まして家庭でもない。でも居場所です。その居場所って、どんなところですか。

土屋 自分が居ていい場所です。居ても誰もおこらないし、安心できて気を遣わなくていい場所が、自分たちが作っている居場所です。

只友 すごいね、そんなこと考えながらやっていたのですね。ほんとうにプラスワンですね。

宮崎 さっきの台風の話聞いて思ったのですが、学生からすれば居場所を作っている側ですが、台風がきてもきてくれる子どもたちがいるから、私たちの居場所にもなっている。この相互作用的な関係性が、非常に興味深いですね。

只友 宮崎さんの指摘のように関係性というのは、一方的なものではないということですね。きてくれる人がいる

から、作っている側の人も共に学び、そして、共に育つという素敵な関係性があるね。

土屋 本当にそう思います。大学の授業に出ていなくても、居場所に行ってみんなと話している。僕たちにとって居場所です。

只友 なるほど、今の私たちの社会にとってそういう居場所が、今後ますます大事になってくるような気がします。

では最後に、これからさきにどんなふうに活動をしていきたいかについて、お話ししていただけますか。

一人ひとりの力を引き出す社会へ

魚見 ひとこと言えば、共に学び合える場を、もって作っていききたいということでしょうか。当初スタートした龍谷大学をこえて、京都のいろんな大学生や企業のみなさんと、そういう場をもっと作っていききたいと考えています。具体的には二条城の近くの元・小

学校を拠点として、大学や企業の枠をこえて共に学び合える場を作る。一人ひとりが意欲をもって、いきいきと働くことができる、そういうきっかけとなるような場を共に作っていききたいと考えています。

宮崎 障がい者のみに限定せずに、何のために自分はこの仕事をしているのか、誰のためになっているのかというのは、どの人間にとっても共通の課題ですよ。さきほどの居場所って何だろうという話と同じように、僕たちも教育って何だろうと、たびたび話してきました。そこで、教育というのは、人間同士の関係性作りだろうと。

只友 さっきの切符を買えなかった仲間の話ですが、時間をかけて挑戦していけば、のりこえられる。私たちはそのところをあまり意識しないできましたが、欠けている一つひとつを丁寧にケアして発達させていく。それは一人じゃできないので、みんなと一緒にやっていくとうまくいく、そういうこ

とに気づかされました。

宮崎 SDGs の目標の中に「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、福祉を促進する」「人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する」というものがありますが、自分たちは何のために働いているかを一緒に考えながら、「与え合う分かち合う」存在になつていく。それが、私たちの理念です。只友 まなサポ+1は？

土屋 基本は安心してこられる居場所作りですが、今ひそかに考えているのは、小学生から大学生まで集まることのできる場所ですね。そういう場所は、なかなかありません。まだ模索中ですが、そんなことをやっていきたい。渡久山 関西で住んでみて、関西の人って挑戦する姿勢が強いなと思いました。だから、私も同じように挑戦していきたい。そのためにフィードバックができる体験を、もっともつとしていきたい。

また、私はカンボジアに行った経験から、海外の人々とコラボレーションできればと思っています。滋賀県は工場労働の外国籍のかたが多いので、学習支援をしている団体があります。そういうところとコラボレーションしていければと思うと共に、日本各地のさまざまな分野の人にも加わってもらい、その中でフィードバックし合いながら進めて行くことができればいいなと思います。

只友 私たちの社会では、ある標準的な型にどれだけでもまっついているかどうかの評価の基準になってるところもあって、そこからちょっと外れると、障がいがあるとか問題児だとか言われちゃうこともある。社会が都合のいいように、レッテルを貼ることもある。でも、それは違う。一人ひとりの能力をちゃんと引き出すことができれば、たぶん私たちの社会はもっと豊かでいいものになります。

今日、この座談会に出席してください



つたかたは、社会の中に入って、すべい力を引き出すことをやっておられる。私たちの社会が、まだ実現できていない最前線のことを手がけられていると、再認識させていただきました。

「依存症」じゃ、ダメ、絶対！

やめる自信のないアディクト(依存症)と、
やめさせたい社会の社会学

三重ダルク代表 市川 岳仁

■「ダルク」とは何か

ダルクは薬物依存者自身による薬物依存者のための回復支援活動である。薬物依存の当事者である近藤恒夫が1985年に東京荒川で始めた。1985年当時といえば、精神障害者の多くが病院に長期収容されていた時代で、当事者による地域生活のための拠点など考えられなかった時代である。近藤を支えたのはカトリック教会のロイ・アッセンハイマー神父。この神父もまたアルコール依存を抱える当事者であった。世の中が依存者の回復など全く考えなかった時代、当事者は自分たちで支え合うほかなかった。なんとも皮肉な話ではあるが、一見すると不遇とも思えるこの状況こそが、当事者たちに大きな恵みをもたらした。

ダルクではたくさんの回復者が輩出された。東京のダルクで薬物をやめた人が名古屋、横浜で新しいダルクを開いた。すると、今度はそのダルクから次の回復者が生まれる。私もその一人。90年代の中頃までには、全国に10ヶ所ほどのダルクが生まれた。そこからはねずみ算式。2019年現在、全国に80ヶ所以上のダルクの拠点があり、これらはすべて当事者によって運営されている。一日あたり1000人近くの薬物依存者がダルクで回復していることになる。こうなるとダルクが社会に与える影響は大きい。真っ先に反応したのは法務省で、2005年には全国の刑務所が薬物で服役中の受刑者の「薬物離脱指導教育」をスタート。ダルクのスタッフを講師として招き、回復の経験を受刑者に伝えることを始めた。さらに、「一度薬物にハマったら、二度と抜け出すことはできない」との観点で「ダメ、絶対」を貫いていた厚生労働省が、近年では「依存症は回復できる病気だ」と言い始めた。この変化の背景には、ダルクにおける薬物依存者たちの回復の姿があったことは間違いないだろう。回復できることを示して示した。まさに薬物依存者あつばれである。

ダルクスタッフは基本的に薬物依存の当事者であるだけで、特別な教育を受けてなるわけではない。この「特別でない」ことがとても重要なのだ。依存者はダルクにやってくるまでに、すでに多くの専門家による関わりを経験してきている。少年時代には鑑別所、少年院、成人してからは刑務所、精神

病院……。いつも治療や矯正の対象だった。そこには必ず権威構造が存在し、依存者は弱いほうの立場である。これが心地いい人はいない。誰だって自分を頭ごなしに否定されたくないし、それが良からぬといつて矯正されたくもない。治療はその人のためと言いながら、治療が必要であるということとは、結局、今のあなたでは「ダメ」というメッセージである。たとえその問題に自分自身が食い尽くされて困っていたとしても、助けを求めるのは自分自身からでありたい。一方的に断罪されて、批判されて治療や矯正の対象になることは、まったく御免なのだ。この点、ダルクのスタッフはこの問題の経験者であるから、こうした当事者の気持ちがわかる。そして、一流の支援スキルを発揮する。

■私と同じ人間がいた

少し私の話をしよう。私は小学校の卒業間近に起こしたスキートの滑落事故をきっかけにパニック発作を起こすようになり、精神科を受診するようになった。出された精神安定剤等を常用するようになり依存となる。だが、一番辛かったのは、前述の時代背景から自分の精神科通院を誰にも言えなかったことで、今でいう保健室登校のようになった。高度経済成長からバブルへと向かう日本で冴えない思春期を過ごすことになった。私は何者にもなれないまま大人になった。自分の存在を隠すことは究極的に自分に失礼な行為だ。この自己否定

は多くの弊害を生んだ。自分の存在価値を感じさせてくれるもの、それはセックスだったり、物だったり、耽溺した。だが、自信がないから仕事も人間関係もうまくいかない。社会における自己効力感が失われてくると、ますます問題行動が増える。まるで自分がダメな人間だと自他共に言い聞かせるかのように問題行動が増える。罪を犯した人間を刑務所に入れたら心を入れ替えるなんてのは嘘だ。多くはますます犯罪者らしい行動を示すようになる。とうとう悪い薬にも手を出すようになった。逮捕はされなかったが、私の状況に胸を痛めた家族がダルクを見つけてきた。私にダルクの講演会に行ってみるといった。

最初に出てきたのは名古屋ダルクの外山憲治代表(当時)で、「薬物依存の外山です」と名乗った。面白いと思った。自分のことを薬物依存者だなんて言う人を初めて見た。自分自身も含め精神病院で何人かの薬物に問題のある人間と出会っていたが、誰も自分のことを薬物依存者だとは思っていなかった。さらに衝撃だったのは、外山氏の話だった。デパートの重役の息子が十代のシンナーに始まり、やがて鎮痛剤のセデスにハマったこと。何度も精神病院の出入りを繰り返した挙げ句、家族に追い出されるように東京の近藤恒夫を訪ね、薬物のない人生が始まったこと。一日100錠ものセデスを飲む生活では、バスと正面衝突したり、車ごと川に転落したこともあったこと。世間一般の人が眉を擡めるであろう内容に私の

心は踊った。私も精神安定剤を服用する間には、何度も交通事故を起こし、崖から車ごと転落したことも、川に落ちたこともあったのだ。酒も飲まない酔っ払いだった。自分と同じ人間がいた！

次に出てきたのは咳止め液（ブロン）がやめられなくなったS君。アルコール依存で暴力を振るうお父さんのいる家庭で苦勞して育った。貧しい家庭を支えるため、中学卒業と同時に社会に出たものの、人が苦手であまり話せない。何度か転職の末、営業職に就いたが、人が怖いS君に営業の仕事は厳しかった。そんなとき先輩に勧められたのが咳止めで、これを飲むとなぜか緊張が解れうまく話せたという。咳止めは瞬く間にS君の生きる杖となった。だが、1回1本の咳止めシロップは、やがて1日に10本20本と増えていく。薬には耐性というものがあり、常用していれば同量では効かなくなっていくものなのだ。やがて咳止め代が生活を圧迫し始めた。二十歳そこそこの若者が1日2万円近い薬物を購入し続けるのは無理がある。あつという間に借金ができた。働くために薬を使っていたのが、薬を使うために働く日々になった。やがてサラ金も借りられないほどの負債状況となり、盗みに入ったところを逮捕された。検察官は「窃盗」だといひ、弁護士は「薬物依存」だといひた。裁判官は執行猶予判決を言い渡し、S君はタルクに通い始めた。実はS君とは、その何年か前に精神病院で一緒だった。病棟内では薬の話で盛り上が

った。病院を出たら一緒に遊ぼうと言っていたが、ついに連絡がこなかった。こんなことになっていたとは。薬物依存のS君が一足先に「回復者」として私の前に現れた。何よりインパクトがあったのは、当時、仕事も続かずお金に窮していた私は、いよいよ盗みでもするしかないと心の中で思っていたのだが、そんな私の未来をS君が見せてくれた気がした。きつと私も捕まるに違いない。くわばら、くわばら。盗みはやめておこうと思つた。

次に出てきたのは女性で、ヤンキー全開の30代くらい。彼女は元暴走族で長年シンナーを吸っていたそうだ。いつしかシンナーは覚醒剤に代わつたが、ずっと薬物と一緒に生きてきた。つい最近、脳腫瘍になつたそうだ。その時、長年の薬物使用を心から後悔したという。だが、脳腫瘍で死ぬのかと思うと、その恐怖を打ち消すためにシンナーを吸つてしまうという。愚かな話ではある。だが、私にはこの女性の話が一番胸に突き刺さつた。きつと私も同じことをするだろうと思つたのだ。薬で人生をダメにしていると思ひながら、人生の恐怖に立ち向かうのに薬が必要だ。すごく分かる！ 自分もそうだと思つた。

ここにいる人たちは、私と同じ人種だと思つた。彼らは一様に自分のことを「薬物依存」だと語つた。講演会が始まる前、自分には薬物問題などないと思つていたが、話を聴いて「自分も薬物依存なんだな」と自覚した。妙な安心感があつた。

やっと自分が見つかった感じ。あの中学1年の精神科受診の日から、自分は人と違う、誰にも自分のことは話せない。と感じた日から13年が経っていた。それから薬物使用が止まるまでには、そう時間はかからなかった。講演を終えて壇上から降りてくる外山氏に思わず駆け寄った。

「僕もダルクに行くかもしれません!」

すると、外山氏は一瞥くれただけで「ふん。そうね」と言った。予想外の反応に驚いた。というより、ちよつと傷ついたが、後になってみればこれが良かった。あの時、外山さんが「ぜひ、おいで! 待っているよ。一緒に頑張ろう!」などと言っていたら無理だった。私はダルクに行けなかったと思う。がんばれなかった気がする。私はそれまでの人生だっ特色々ががんばっていた。だが、それらが全てうまくいかなくて、一番傷ついていたのは私自身だった。そこで「がんばろう」と言われていたらもう無理だっただろう。きつとまた「お前はダメなやつだ」と言われるに違いない。これまでの失敗サイクルがきつとダルクで起こる……。期待されたら無理だった。だから「一緒にがんばろう」ではだめだったのだ。外山さんは「ふうん、そうね」と言った。「来るな」ではない。そのプレッシャーのなさ、期待されなさというのは絶妙だった。同様に、私は今日に至るまで、ダルクで「薬物をやめなさい」と言われたことは一度もない。これはとても重要だ。やめろと言われたら多くの人は無理だ。やめられないから。

やめられない時期を否定されない場所がある、というのほとても大きいことである。やめる自信がない時期にやめることを前提にされたら、逃げるしかない。そう考えると、外山さんは薬物依存者の支え手として非常に優れていたと思う。

■二人三脚で山を登る

私はこうしてダルクと出会い、しばらくして薬物使用が止まった。薬が切れてきて感じる苦しさ、しんどさは、それを乗り越えた経験のある仲間たちに支えられ乗り越えられた。それからの人生に対する不安は、新しい人生を再構築している先を行く仲間たちの姿が希望になった。一番分かっている人たちに見守られる安心感は、精神科医や心理士との間で経験したものとは比べものにならない。刑務所に何度も行ったオッチャンたちが支えてくれた。だから、薬物依存者は危険で恐ろしいなんて、イメージだけで言われると納得がいかない。私は彼らに心を開き、人を信じることを学んだ。だが、私の回復において一番大きかったのは、私自身が誰かの支え手でもあったということだ。

薬物をやめて最初の半年、1年は、決して気分のいいものではない。薬物をやめたからといって、それで人生がどうなるものでもなく、むしろ、素面でこれまでの人生の残骸と向き合うことになる。この時期に再発する人が多いのも頷ける。私の場合も様子が変わったのは1年後か2年後くらい。ダル

クには次から次へと色々な人がやってきて、とても回転が早い。今度は私が新しく来る人の世話をする番になった。ポロポロの人を迎え、ご飯を食わせて、寝かせて、話を聴いてあげて：：そういうことが始まったのである。これがすごくよかった。私は助けてもらって良くなったのではなく、私が誰かを支えるという役割を持つてから回復が始まったと思っている。私はそれまでずっと指導され、治療され、立ち直らせようという力を外から与えられてきた。何も嬉しくない。結局自分是否定されているのだと感じた。治療されることは病んでいるということ、指導されるということは違っているということ。そうではなくて、そのままの私が自問自答しながら、誰かを励ましながら、二人三脚で山を登っていくような関係性こそが私を救ったと思う。当事者が当事者をサポートする関係の中で自分の力に目覚めた（エンパワーメント）。本当の自分と向き合いながら、自己否定せずにいられる、自分を恥じるでも背伸びするでもなく、等身大の自分を受け止めながら、仲間同士が反応し合う、出会いと体験を重ねていくようなプロセスだった。モデルとなる人を見つけ、また自分が誰かに何かを与えられた感覚というのは嬉しいもので、やっと居場所が見つかったという気がした。自分が人にやさしい気持ちを持ち持ったり、愛情をかけられることにも驚いた。過去は、他人は自分を脅かす存在でしかなかったのに。同じ状況の人を手を差し伸べている自分はまんざらでもない。薬物依存者

で良かったと思うようになった。先ほど、ダルクのスタッフは特別な教育を受けてなるものではないと書いた。この敷居の低さが多くの依存者の生き直しを支えていると思う。高等教育・専門教育を受けた者しか援助者になれないのであれば、こうした自己の存在の捉え直しは不可能だっただろう。

これが1990年代の半ばのことで、数年後、三重県に全国15番目となるダルクを開設した。以来、20年間三重県で薬物依存者と関わっている。

反面、私たちをして、薬物依存者としての語りしか期待しないのはまた問題である。例に漏れず、私も自分の語りがだんだん胡散臭くなった。三重ダルクを始めて5年間くらいは、新たに手に入れた「薬物依存からの回復者」という役割に満足していた。だが、薬物をやめて10年くらいが経った頃から、閉塞感を感じるようになった。薬物をやめて10数年を経た私は、新しい仲間の一番の理解者ではなくなっていた。今日薬物をやめようとする人にとっては、少し前を歩く人こそが一番のカウンセラーなのだ。私は無意識で自分の過去を強調して話すようになっていた。まるで、そこにしか自分の価値が無いかのように。だが、十数年前の話を今日のこのように臨場感をもって話すのは大変である。

■ 「生きる」と「こそ

回復の隘路。この時期、全国の多くの同期であるダルク代

表者が同様の経験をしたようである。調子を崩す者もいた。私もダルクを辞めようと思った。だが、ダルクをやめて違う仕事に就こうとすると、これまでのキャリアをどう説明すればいいのか。そもそも、ダルクは職業なのか。私はこの十数年間、何者だったのか。ここに、薬物依存者が経験する幾度目かのハードルを理解した。社会はいつ、私をただの人として認知するのだろうか。

私は援助職者として自分を定義し直すために、何年かかけて精神保健福祉士の国家資格を取った。その後、龍谷大学の大学院（法学研究科）に学ばせていただき、2010年に修了している。この一連の学びの経験が私の世界を大いに広げてくれた。どちらかというとネガティブな理由で始まった勉強ではあったが、依存症以外のこと、例えばその他の病理や障害特性、障害者の歴史や制度変遷などを学ぶことは、現実理解に多くの新しい視点をもたらした。そもそも、私自身がそうであったように、薬物依存者にはそれに至る背景があるのだった。知的障害のために子供の頃から勉強についていけず、学校で嫌な思いをしてきた人。十分な学歴もなく、不利な条件のまま若くして社会に出て苦労して、そこでもうまくいかずに、点々としながら生き延びてきた人。原家庭での被虐待経験から、人を信じられなくなった人。NOということができず、すぐに他人や関係性に支配されてしまう人。心の傷をお酒や薬の力を借りて押さえ込もうとする人。差別や偏

見など、何らかの社会的排除の対象となってきた人など。皆それぞれに生きづらさを抱えているのだった。自己治療説に基づけば、これが、薬物がやめられない理由である。これらは薬物をやめることで解決するものではなく、やめた後の生きづらさそのものでもある。問題の本質である。当然、私たちは薬物をやめるのではなく、再び「生きること」目指すようになった。必要なのは、薬物問題からの回復ではなく、生きることにそのものなのだ。これが、今日私たちが辿り着いた地点である。

ダルクが始まって30年余。ついに国や専門家による依存症対策が始まった。だが、私は昨今の依存症対策に警鐘を鳴らしたい。薬物問題を持つ人を安易に「依存症」として括くことは、その人を基本的に医療の対象と定義してしまうし、酒や薬物をやめることに焦点化してしまう。それはむしろ、問題の本質からその人自身を遠ざける気がしてならない。さらに、地域社会が、そういう経歴のある人を理解し、その上で、そういう人々を受け止め、支援する、つまりは善意以外の何物でも無いわけだが、特殊なニーズの持ち主と定義して、そのための支援構造を作ってしまうことは、その人をいつまでも過去に閉じ込めてしまう。私は、薬物依存者であれ、その他の障害者であれ、依存症者として、障害者としてではなく、ただの人として、より良い人生を生きることを模索出来る世の中であってほしいと願う。

身近なものを見つめなおす ことからはじめよう

文学部非常勤講師 中平了悟

■お寺でSDGsを考える

2018年6月23日土曜の夕刻、兵庫県尼崎市のお寺、西正寺であるイベントが開催されていました。そのイベントの名前は「テラからはじまるこれからのハナシ。」(以下「テラハ。」と略称)。社会課題をテーマに学び、参加者同士が語り合う会です。その日は「SDGs」これからの世界が目標としているものゝ地域からできることを考える」と題して、SDGsについての学びと語り合いが行われました。

当日の参加者は約30名。参加していたのは、行政やNPOの職員、学校の教員や会社員、あるいは主婦。実に多様な立場、年齢層の人たちが集まりました。講師のレクチャーを聞いた後、それぞれの立場からSDGsや、地域の課題につい



西正寺でのSDGsについてのイベントに集う人々

て熱い対話が行われていました。多様な立場、年代からそれぞれにこのSDGsというテーマに関心を向けていることが感じられました。

お寺でSDGsについて学び、語り合った参加者の言葉に次のようなものがありました。「なにげない、当たり前を感じる日常にある課題に気づくことが大切だと思った」、「こうやって、地域で課題や社会のあり方について語り合うことができる場所の大事さを強く感じた」、「自分たちのこととして、ちゃんと考えていくことが大事だとあらためて分かった」。とても前向きに、そして自分たち自身の課題として皆さんが

受け止めているのがとても印象的でした。

■SDGsとはなにか

ところで、地域のお寺でSDGsを扱ったということを感じて思われたかもしれません。

このSDGsとは、2015年9月、国連総会で採択された2030年までの国際目標です。17のゴールと、169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）」が掲げられています。頭文字をとってSDGsと呼ばれています。

これは日本も含めた世界のすべての国・地域を対象とした普遍的な目標とされています。SDGsの17のゴールが示されたカラフルなパネル（表紙裏参照）がよく知られています。国際目標といえば、とてもスケールの大きな問題で、私たちの日常生活とは関係がないもの、あるいは、縁遠いものとして感じられてしまうかもしれません。国連とか政府とか、大きな組織が取り組むべきことで自分たちには関係ないことではないか、と感じられた方もいらっしゃるかもしれません。先ほど、お寺という場所でSDGsを考えることが意外に思われたかもしれない、と言ったこともそうだったことと重なってきます。しかし、はたしてそうなのでしょうか？

実はSDGsについて考えていくと、実は、職場や学校（もちろん、大学も）、クラブやサークル活動の場といった単位でも、

さらには家庭や個人としても、取り組むべきこと、意識すべきこと、そしてできることがたくさんあるのです。

実際に採択から3年余りが経ち、日本国内でも政府や自治体、企業やNPOあるいは学校等さまざまな機関・組織で、さまざまなさまざまな取り組みが進められています。それらについては、首相官邸や外務省のホームページ等で参照できます。是非一度参照してみてください（首相官邸SDGs等と検索してみてください）。

■見えにくい「困難」

SDGsを通して、身近なことから少し考え直してみたいとおもいます。「テラハ。」参加者の言葉にも「なにげない、当たり前を感じる日常にある課題に気づくことが大切だと思った」というものがありました。

社会課題、あるいはそれに伴う困難や生きづらさというの



お寺でSDGsについて語り合う

は、それが見えにくい、可視化されていないということによって、より深刻になっているといえるかもしれません。

例えば、日本における貧困ということについて考えてみましょう。「貧困」はSDGsの第一にも挙げられています。日本で経済的に「貧困」といわれる状態にある人は、どれくらいいると思われるでしょうか？

OECD(経済協力開発機構)の2015年の統計によると、日本の貧困率は、全体で15・8%とされています。18歳未満の子どもの貧困率は、13・9%とされています。つまり、全人口でいえば5〜6人に1人の割合で、さらに18歳未満(つまり「子ども」)でも、7人に1人の割合で「貧困」といわれる状態にあるとされます。

「え？そんなに!？」と思われるかもしれませんが。この数字が示す貧困とは、飢餓や生命の維持が困難になるような「絶対的貧困」(衣食住に事欠き、1日1・25ドル以下で過ごすといった、生存の危機が生じるほどの貧困状態)ではなく、「相対的貧困」(その国の平均から乖離し、多くが「当たり前」と感じられるものを享受できない貧困状態)といわれるものを示した数値です。

この相対的な貧困は、見かけ上は多くの場合、住居もあり、食生活も服装も「普通」と変わりなく生活しているように見えるため、周囲からは気づかれにくいのです。また当事者も多くの場合、自身が貧困であることを隠し、気づかれないよ

うにしていることが多いのです。

しかし、隠し、気づかれないようにしていても、経済的な困窮のなかにあることで困難を抱え、排除される状態にあります。例えば、子どもが「塾」や「習い事」、あるいは学校生活でも「修学旅行」や、「部活動」といった、周りの人が当たり前のようにしていることまであきらめざるを得なかったり、そもそも「できない」と絶望を感じながら過ごしてきたという経験をしている人も少なくないのです。(もしかすると、この文章の読者の中にも、自分のことのように感じられる人がいらつしやるかもしれません)。

そういった学力を得る機会や成長に結びつく経験から経済的な事情等によって「排除」されていることによって、進学や就職に影響を受け、大人になってもその状況から抜け出すことができない状態が生じています。さらにそれは、次の世代にまで貧困や「排除」が連鎖するという現実があることが指摘されています。

可視化されにくい、見えない生きづらさは、貧困に限ったことではありません。DVや虐待といった暴力的な被害、あるいは自死・自殺等、当事者や身近な家族が抱えている困難は、一見当たり前前の日常にとけこみながらも、想像以上に多くの人が抱えているのです。

■身近な「生きづらさ」に気づくこと

「貧困」が見えにくい課題であるといっても、「それって行政とか、専門機関がなんとかすることじゃないの?」「一般市民がどうこうできることではないんじゃないの?」という声が聞こえてきそうです。

しかし、「テラハ。」の話し合いでは、その行政や課題に向き合うNPOで働く人たち―つまりその課題の現場で働く人たちが、「困難を抱えた人を地域でどううけとめるのか、地域のひとどうつながるかということが一番大切なことだ」と語ってくれていました。

その理由を詳しく聞いてみると、なるほどと思うことがありました。それは、行政や専門機関が「困難を抱えた人がいる」ということをどうやって知ることかということでした。その多くが、地域や学校等からの連絡や通報ということでした。つまり、その人の身近な生活圏からの連絡がないと、困難を抱えた人がいる、そこに課題があるということが気づかれず、にいてしまうということなのです。気づかれないということは、「なかったことになってしまふ」ともいえます。

例えば、救急車を例に考えてみましょう。救急車は急病の人、大けがを負った人を助けにきますが、救急車、救急隊それ自身が「どこにけが人がいるのか」ということを探しているわけではありません。通報や連絡を受けて初めて出動し、

対応を取ることができます。もちろん本人が連絡や、SOSを出すこともできます。しかしそれ以上にその時に周りにいる人が119番に連絡することがあるように、生きづらさや生活上のトラブルや困難も、周りの人が問題があることを察知し、適切な機関や団体につないでいくことがとても重要な「セーフティネット」としての機能を果たしているのです。

最近では地域コミュニティのあり方が変化しています。隣近所のひととの交流がまったくないという「地域での孤立」も問題になっています。つながっていないければ、やはりそこに「困難」や「生きづらさ」があることが知られることはありません。地域のつながりをどのように作るのか、身近な人間関係の構築と、課題があるということを察知する感を高めること、そしてその課題や困難を適切な相手へつないでいくことがとても大切なことなのです。

冒頭の「テラハ。」の参加者の言葉にも「こうやって、地域で課題や社会のあり方について語り合うことができる場所の大事さを強く感じた」というものがありました。何気ない日常のなかにこそ、課題や困難に対応するもつとも大事な機能がそなわっていないといけないということが指摘されていたように思います。

■ともに考え、作り上げていくこと

再びSDGsに話をもどしましょう。SDGs（持続可能

な開発目標」という名称が示すことは、裏返せばこのままでは「持続不可能」な社会、未来になりかねないという危機感の表れでもあります。SDGsの目標をよく見てみると、対立的な関係になる目標があることに気がきます。たとえば、目標8では経済成長が、目標9では産業技術革新が掲げられています。一方で、目標13、14、15では、気候変動への対策、そして海、陸の自然保全が目標とされています。これら「経済成長」と「環境保護」は両立することもありますが、多くの場合は対立する関係になります。どこまでの経済成長をめざすべきか、そしてその経済成長にはどこまでの開発（環境への負荷）が許容されるのでしょうか。または、逆に環境の保全のためにあきらめるべきこともあります。

■日常生活のなかでの選択

それらは誰がどのように決めていくべきなのでしょう。世界や国のレベルでもそうですが、その判断は、私たちの日常の中にもきつとあるはず。環境のために負担や不便を選ぶこともあれば、生活や経済のためにある程度の環境への負荷を選ぶこともあるのではないのでしょうか。

身の回りのものひとつとっても、その原材料となったもの、それが作られた場所や工程、関わっている人がいること、あるいは私たちがそれを使った後にそれが行き着く先にいるであろう誰かを想像することができます。また、1000年・

1000年先にまで想像を及ぼすこともできるはず。です。

どのような社会を求め、どのような未来を作っていくのか、それは、私たち一人ひとりが、どんな暮らしをするのか、どのような負担を引き受け、どのような生活を喜びとしていくのか、主体性をもって考え、身近な人と語り合い、共有し、共感・共鳴しながら作り上げていく先にあるものを考えるということなのではないのでしょうか。

■身近なものを見つめなおすことから

私たちの周りには、実はさまざまな課題や困難があります。自分自身が課題や困難を感じていなくても、すぐ近くに困難や生きづらさを抱えている誰かがいるかもしれません。

また、身近なものが環境破壊の一因になっていたり、世界の困難を抱えた地域から搾取するような形でもたらされているものがあるという事実があります。身近なモノやコトを通して課題や困難に気づく目や感性を持つこと。それが、身近な誰かを助けたり、遠く離れたどこかに、小さくても影響をもたらしつつあるはず。です。

SDGsは、とても大きな世界レベルのことでもありながら、私たちの身近な日常のあり方とも深く結びついていることでもあるのです。ぜひ一度、SDGsの目標を読んで、自分たちの身近なこと、身の回りにあるものを見直し、見とおすまなざしを持っていただけたらと思います。

パンと銃と

—エルサレムで感じたメディアが
伝えないリアル—

国際学部国際文化学科4年生 由良 捺美

高校生の時から夢見ていた「岩のドーム」を見るために、2018年2月、私は高校の友人と二人でイスラエルを訪れました。旅行の計画を立てるために、中東の周辺国との関係性を学ぶことから始めました。入出国することができるといっても定かではなかったこともあり、旅行というよりは冒険のような感覚でした。

無事にイスラエルに入国し、到着した首都のエルサレムは、想像よりはるかに発達した街であったことが第一印象です。道路は整備され、新市街の夜はネオンが光り、日本のメディアで見るとような紛争とは程遠いように感じられました。しかしそう思ったのも瞬時に消え去ります。エルサレム旧市街に入るためのダマスカスゲート（ダマスカス門・エルサレム旧市街の囲む城壁に設けられた主要門。城壁の北西にある。）を通る

際に、大きな銃を持ったイスラエル兵士が複数人駐屯していることに気づきました。ダマスカスゲートでは止められ荷物検査を受けるなどはなかったものの、旧市街の中にある嘆きの壁や岩のドームといった「聖地」にあたる観光スポットでは、訪れる人全員に荷物検査が行われていました。イスラエルに滞在中、非常に多くの兵士を見かけることになりました。怖いと感じたと同時に、街中を兵士が見守ってくれているという安心感もありました。私が彼らを見慣れてしまったのか、数日後には怖いという感情も薄くなり、ある意味でイスラエルは平和であったと感じています。

帰国して一番に思ったことは、「日本は本当ののんきだな」ということでした。街には銃を持った兵士もおらず、誰かに抑圧されて生活することもなく、ただ「普通」に暮らせることのギャップを感じました。観光をしに訪れたとはいえ、国際問題や軍事国家など、まさに私が龍谷大学で学んだ中東政治の情勢を目の当たりにしたこともあり、イスラエルのことを考えずにはいられなくなりました。そうした違和感や日本での生活の中にあるつかかりを、なかなか自分一人では消化することができませんでした。自分のイメージとは違った一面も持つイスラエルを、リアルな中東の姿を、他の人は何を感じ、何を思うのか、単純に知りたくありません。イスラエルというあまりにもかけ離れた存在を共有し、違和感を解消したかったです。そんな時、仏教活動奨学金の懸賞企画

を知り、写真展の開催を思いつきました。私のつたない話をするより、写真によって直接目で見てもらう方がよりインパクトを与え、そこにある空気感を感じてもらえると考えました。まったくの一人で始めることに大きな不安はありましたが、それでも写真展開催に向けて進めることができたのは、宗教部の職員さんの応援と、私の「あなたの感想を知りたい」という思いの強さでした。そんな思いから、企画名を「あなたと私と考える写真展」にしました。本やインターネットを通じてではなく、私の体験を共有し、写真を見る人それぞれが感じて発される言葉を得たかったです。加えて、中東のリアルな姿を伝えることができるのは私しかないと思いました。中東の風景を、ごく普通の大学生の目線を通すことで、中東問題に対しより身近に興味を持ってもらえると考えました。私の企画に興味を持って下さった方もおり、懸賞企画が採択され、多くの人の支えやアドバイスをいただきながら、一人で始めた写真展が少しずつ大きくなっていきました。

私が写真展を通じて伝えられることは、「平和のありがたさ」だと思います。街に兵士がいること、どこかへ行くのに荷物検査をされること、銃をよく見ることを、「非日常」に思うことは幸せだと私は感じます。ある意味でイスラエルは平和だと先に述べましたが、日本とは平和の成り立ち方が違っています。日本の平和は憲法や外交によって支えられますが、イスラエルは圧倒的軍事力によって成り立っています。



夢にまで見た岩のドームでジャンプ（左は筆者）

す。言い換えれば、街に兵士がいないと、荷物検査をしないと、銃を携帯しないと「平和」を築くことができないかもいれないのです。しかし、その平和によってパレスチナは抑圧

されることになりました。パレスチナの領域を侵食する分離壁を維持したり、入植地に住まわせるイスラエル人を守ったりすることができるのは、やはりイスラエルの軍事力によるものです。その武力にパレスチナは成す術もなく、ただ石を投げることしかできませんでした。

写真展に足を運んでくださった方の中で、私と同じように「日本は平和ボケしている」と感じていらっしやる方がいました。正式な軍隊を持たず兵役もない日本において、戦争や紛争はリアルに感じないのは当然のことだと思えます。実際戦後70年以上、日本は平和に暮らしてきました。平和ボケはもしも戦争が起きたときに大混乱を生むかもしれませんが、決して悪いことではないと私は考えています。ただ、平和は絶対的ではありません。重要なのは、それを「知っていること」だと思います。日本はたまたま昔から平和であっただけで、その間に世界のどこかでは紛争が起きていたし、今も起きていくかもしれないし、私がパレスチナの道ですれ違った少年は、今まさに銃を突きつけられているかもしれないのです。私が帰国して感じていた違和感の正体は、きっとそういった平和のとらえ方に対する戸惑いだったのです。

今現在も日本が平和であることに対し、ありがたさを身に染みて実感することは、すぐには難しいと思います。写真展を通じて「実感」することは難しいですが、多角的視点から平和を知ることが、少なからず可能ではないかと感じてい

ます。見てくださった方の感想の中で、イスラエルでの日常の風景に興味を持った方が多くいました。現地での生活という視点から、おかれる環境の違いを感じる方が多くいらっしやっただだと思います。現実味のなさからか、「本当に現地に行つて撮つた写真ですか」と質問されることもありましたが、私と友人が、あの日あの場所で撮つた写真に間違いありません。写真に写るものはそのときにあった事実です。しかし、一方向からしか写すことができず、全てではないことも頭に入れておかなければなりません。写真に写らない歴史や人の言葉、感情を見る人それぞれが想像してはじめて、そこに写るものと「写らないもの」への理解が進むと思います。私も同じように、写真を見て下さる方々とお話をして理解を進めていきました。「あなたと私と」でそれぞれの解釈をし、共有していくことで平和を知るのです。

「あなたと私と考える写真展」を開催したことで、旅をしてから約1年、ようやく違和感を消化できそうなところまでやってきました。それほど時間と、多くの人の助けを必要とする題材になってしまいました。イスラエルの旅や写真展を通じる方も多く見受けられました。イスラエルの旅や写真展を通じて、平和とは何なのか、普通の生活では考えることのなかったことについて深く思いを巡らせる機会が、私にとつてはもちろん、「あなた」にとつても貴重な経験になることを願っています。

共是凡夫

共是凡夫（ぐうぜんぼんぶ・聖徳太子『憲法十七条』第十条より）

絶対平等の理に背いて何事にも執着し、自己の価値観において善悪や賢愚を判断してしまうのが私たち人間である。それを「我かならず聖なるにあらず、彼かならず愚かなるにあらず。共に是れ凡夫（ただひと）ならくのみ。」から自己を含めて人間の平等であることを学び、「共に生きること」を実践することをあらわす言葉として引用した。

（以下の文章は、人権啓発パンフレットの内容を一部修正して掲載したものです）

今もなくならない

部落問題・同和問題

龍谷大学経営学部准教授 妻木進吾

2016年12月、「部落差別の解消の推進に関する法律」が成立し、施行された。これは、「現在もなお部落差別が存在する」との認識のもと、「部落差別の解消を推進し、もって部落差別のない社会を実現すること」を目指す法律である。

部落差別は、昔に終わった話ではなさそうである。

近世の日本社会では身分秩序の最下層に「えた」と蔑称される賤民身分が置かれた。1871年、明治新政府が賤民の身分・職業を平民同様とする「解放令」を布告するが、形式的なものにとどまり、かつて賤民身分だった人々と、後に差別部落や同和地区と呼ばれるその居住地に対する差別（部落差別）は、解放令以降も厳しく存在し、人々の暮らしはかえって苦しくなりさえた。1922年には、被差別の当事者が部落差別の撤廃を求め、全国水平社を結成する。京都で開催された設立大会で読み上げられた、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で終わる宣言は、日本最初の人権宣言と呼ばれる。これらは、中学・高校の歴史の授業で習ったことがあ

るといふ人も多いただろう。

その後も部落差別は根強く残り、厳しい暮らしも続いた。部落出身であることを理由に安定就業から排除される。その結果、貧困から抜け出せず、子どもの学歴達成は低位なままとなる。不利が不利を呼ぶ連鎖に部落差別がドライブをかけ、他方で貧困や低学歴などの地域的集積は差別の根拠とされる。こうした差別や不平等、それらが相互に原因・結果として結びついた諸現実、部落問題・同和問題と呼ばれる。

やがて、被差別部落の劣悪な生活実態そのものが差別であるという論理により行政責任を追及する部落解放運動の高揚と、それを受けて本格化した同和対策事業によって地域の姿は変貌する。1969年の同和対策事業特別措置法以降33年間、住環境の改善などの特別対策事業が行われた結果、たとえば関西の都市部の部落では、老朽木造密集住宅街から中高層の公営住宅が多くを占める地域へと、その風景は一変した。日本全体の経済成長もあり、低学歴や不安定就業、貧困など、部落外との格差は残りつつも概ね縮小していった。しかし、近年、日本社会全体の不安定化傾向に加え、同和対策の特別事業が2002年に終結した影響もあり、被差別部落の生活実態は再び不安定化・貧困化しつつあるとの指摘もある。なお、2010年に大阪市内のある被差別部落で実施された訪問面接調査は、こうした近年の実態を知る上で重要な調査のひとつであるが、この調査には龍谷大学の学生十数人も参加

しており、彼／彼女らは一軒一軒の住宅を訪問し、住民から生活実態を聞き取っている。

では、差別についてはどうだろうか。部落解放運動や同和行政の粘り強い取り組みもあり、部落差別はかつてに比べればずいぶんマシになった。しかし、冒頭の法が指摘しているように、なくなつてはいない。事件化されることは少ないとはいえ、部落出身であることを理由として結婚に反対される結婚差別はそれほど珍しいものではない。

2011年に発覚した、身元調査を主な目的として東京の法務事務所が全国3万件の戸籍謄本等を不正取得した事件は、部落出身者を忌避する人々が存在していればこそその事件である。また、大阪府民対象の意識調査(2010年)では、「結婚相手が同和地区出身者かどうかが気になる」割合が2割に達することが明らかにされている。2016年には、インターネット上に同和地区の地名リストが公開される問題なども起こった。被差別部落の出身というアイデンティティが、その人を構成するアイデンティティの一つとして当たり前前に受け止められる社会を作り上げていくという課題は、まだ私たちに残されている。

「女子力」って何？

龍谷大学経済学部講師 金子裕 一郎

「○○ちゃん、女子力高いね」。

皆さんもよく使ったり、聞いたりしませんか。でも、「女子力」ってナンでしょうか。皆さんは「女子力」という言葉にどのようなイメージを持っていますか。「女子力高いね」といわれて、あなたは嬉しいですか、嬉しくないですか。

あるアンケートでは、次のような意見が紹介されています。

「いつからか飲み会でのサラダを取り分けると、女子力が高いといわれるようになった。……日本には、『女性は気配り、料理などの家事ができたほうがいい女といえる』という固定観念がある」（『朝日新聞』2017年1月22日朝刊）。どちらかというと、ネガティブなイメージです。でも、「今日の服カワイイね、女子力高い！」といわれて、嬉しい人もいるはずです。そのような人にとっては、それをダメといわれても困ってしまいますね。

菊池 [2016] の整理を借りてみましょう。「2000年代以降になると、……「フェミニズムは終わった」という言説が支配的になっていたりことや反フェミニニスト的感情が一般に、とくに若い女性に広がり、「女性たちは新しい女性性を身につけるよう社会的に要請され」るようになった。「それは、身体的資産として女性性を感じ、性的客体から性的主体へと変化すること……などを内容としている。そのような新しい女性性を取り巻くように、性的差異を再主張する言説が流行している」。続いて米澤 [2014:191] を引き、「装いの力としての「女子力」は、基本的に男性に向けられているものではない。むしろ、「女子」として生きていくための原動力となっているものである。……妻や母といった社会的役割、良妻賢母規範を軽やかに脱ぎ捨てるファッション誌の「女子力」はもっと評価されるべきであろう」。

このように、同じ言葉でも人によって受け取り方や評価は異なります。他人への気遣いや料理が得意なことを人として評価してもらえないのも違う気がしますね。モノならば、誰かにプレゼントしたり、誰かのモノを盗ったりすることの善悪は比較的わかりやすいですね。でも、ある人への評価や判断は、こちらが良かれと思っただけのこと、したことが、相手を傷つけてしまったり、貶めてしまったりします。それがその人にとって好ましくない、変更の効かない関係で定型

化されてしまうと、偏見や差別につながってしまいます。時々リセットして、その人自身を見直す機会をもちたいものです。

【参考文献】菊池夏野 [2016] 「女子力」とポストフェミニズム・大学生の「女子力」 使用実感アンケート調査から」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』25号、pp.19-48。

米澤 泉 [2014] 『女子』の誕生』勁草書房

「見えない＝いない」ではない セクシュアルマイノリティ

龍谷大学政策学部准教授 吉本圭佑

ここ数年、日本でもLGBTの4文字を見る機会が増えたように思う。LGBTとは、性のあり方が多数派とは異なるセクシュアルマイノリティの代表例で、Lはレズビアン(Lesbian、女性同性愛者)、Gはゲイ(Gay、男性同性愛者)、Bはバイセクシュアル(Bisexual、両性愛者)、Tはトランスジェンダー(Transgender、身体の性と心の性が一致していない人)の略である。LGBT以外にも、男性・女性という枠に当てはまらないXジェンダーや、性のあり方を模索している状態

にあるクエスチョニングなど、多様なセクシュアルマイノリティが存在している。欧米では、2000年のシドニーオリンピックと2004年のアテネオリンピックで金メダルをとった競泳選手のイアン・ソープや歌手のレディー・ガガ、アップル社の最高経営責任者(CEO)のティム・クック、ルクセンブルクのグザヴィエ・ベツテル首相など、自らがセクシュアルマイノリティであることを公にして(カミングアウトして) 広く社会に受け入れられている。

「最近LGBTが増えたよね」という声をよく聞かすが、果たして近年になって人類に突然変異が起こったのだろうか。いや、同性愛は古代ギリシア時代から存在していたことが記録に残っている。長い不遇の時代を経て、1970年代にアメリカで盛んになった社会運動を契機に、近年では同性結婚を認める国も増えてきた。LGBTは海外でも日本でもずっと存在していたのであって、特に最近になって数が増えたというわけではない。ただ、差別や偏見を恐れて本当の自分を隠して生きていた人々が、カミングアウトしてありのままに生きる選択をするが増えたということなのだ。

日本では、2015年に電通ダイバーシティラボが行なった調査で、人口の7.6%(およそ13人に1人)がセクシュアルマイノリティに該当するという結果が出ている。だとすると、左利きやAB型の人口とほぼ同じ割合であり、クラスの中にいたとしても全く不思議ではない。テレビで見るとな、

「オネエ系」とは限らない。ただ、あなたやまわりの人に言わないだけのこと。「お前ホモかよ、キモっ」といった笑いのネタがまかり通っているから、からかわれ、言いふらされることを恐れて、まわりに合わせて一緒に笑っているのかもしれない。

2016年に龍谷大学人権問題研究委員会が行なった「龍谷大学におけるセクシユアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート調査」では、任意に回答した858人の学生・教職員のうち130人がセクシユアルマイノリティに該当し自認していることが明らかになった。また、日常的にセクシユアリティに関する差別的・嘲笑的な言動があり、傷ついている人々がいることも分かった。このアンケート結果を受け、性別に関係なく使える「だれでもトイレ」の設置や、「性のあり方の多様性に関する基本指針」の策定など、本学は様々な取り組みを行ってきた。

多数派と違うということは、おかしいことではない。性のことだからといって、笑いのネタにしていいたいということでもない。大事なものは、自分の当たり前がみんなの当たり前だと決めつけずに、思いやりの気持ちを持つこと。覚えておいてほしい、「見えない＝いない」ではないことを。

【参考URL】龍谷大学LGBTs交流サークル「にじりゅう」
Twitter: <https://twitter.com/nijiryukoku>

多様な性のあり方に関する本学の対応について: <http://www.>

外国人も社会の一員

龍谷大学国際学部グローバル
スタディーズ学科教授
チャブル ジュリアン

最近、街を歩くと「Foreigners Welcome」と書かれた看板をよく目にする。それもそのはず。来日する外国人観光客の数がこの数年で急速に上昇しているからである。昨年（2018年）一年間だけでも2800万人もの外国人が観光目的で来日した。2020年までに4000万人に達するのではないかと政府観光局は予想している。

しかし、あえて「Foreigners Welcome」という看板を掲げる必要があるというの不思議なことである。逆に、「No foreigners」とか「外国人お断り」などの看板が存在するのも事実である。拒否している店側の言い分としては「日本語で意思疎通が取れない」とか、「マナーが悪い」とか、「他のお客様さんからクレームが絶えない」といった理由があるようだが、だからと言って差別していいという訳ではないはずで

ある。グローバル化が進む中、先進国として、これから「日本人ではない」人々などのように付き合うか、どのように社会を共に築き上げるかが益々重要な課題である。

日本には大きく分けると2種類の外国人がいる。一方はオールドカマーと呼ばれる第二次世界大戦以前に日本に住んでいた、主に朝鮮半島出身者とその子孫である。もう一方は1980年以降に渡日したニューカマー（主にブラジル、中国、ペルー、ベトナムにルーツを持つ人たち）である。現在、日本には日本を生活拠点にしている外国人が230万人いる。日本人と結婚して来日した人や、技術や芸術などのスキルを「売るため」に、または求めてやってくるなど、当初は様々な理由で来日したが、今は「日本が故郷だ」と思っている外国籍の定住者が日本の総人口の約2%を占めている。外国人による犯罪が増えているが、それはごく一部に過ぎない。ほとんどの外国人は一生懸命勉強をして、仕事をして、家族を養って、税金を納めている。それにもかかわらず未だに「日本人」と同等な条件で生活ができない。

法務省による在日外国人を対象にした調査によると、3人に1人は差別的な発言を受け、4人に1人が就職活動で差別を受けた経験があると回答した。例えば、国籍が違うという理由で昇任を断られた人が17%いたり、40%が住宅を巡る差

別を受けたという結果だった。さらに、公立学校に通う外国籍児童の日本語の補助も足りていない。何よりも国政はもちろん、地方自治体レベルでさえ選挙権が与えられていないということも不平等な扱いの証である。

大学では社会の仕組み、経済や経営、法律等々たくさん専門的なことを学べる機会がある。しかし、社会をより良くしようと思うならば、社会の「全」構成員が平等に「共に生きること」のノウハウを考えて、是非実現に向けて行動してもらいたい。

「社会的平等」を否定する

ヘイト・スピーチ

龍谷大学法学部教授 金 尚 均

民族、出自、性別等の属性の理由に対して向けられる侮辱的表現、つまりヘイト・スピーチが、昨今、重大な社会問題になっている。ヘイト・スピーチにはどのような害悪があるのだろうか。単に不快なのであるか。いやそうではない。不平等処遇の犠牲者たる人々の社会的地位の格下げという害

悪とこれによる自尊の侵害を見て取るべきである。このような意味を込めて、このようなヘイト・スピーチは社会的な平等関係（の構築）を阻害し、集団に属する人々の社会参加をする機会を阻害する側面をもっている。なぜなら、ヘイト・スピーチは、人を人として見ない、人に格差をつけること、つまり「二級市民」、「人間以下」として蔑むことに本質があるからである。

憲法14条は、法の下での平等を保障しているが、これは、法の適用の平等性・公正性、権利・義務の公正な分配、法的保護の平等性、生きる権利の平等な保障をその内容としていると考えるべきである。特に、最後の生きる権利の平等の保障とは、法が保護すべき根本的権利である生存権保護の平等を意味するが、属性に対する侮辱的表現は、集団に属する人々に対して平等に法適用、権利保障そして権利の行使を否定している。「二級市民」、「人間以下」とは、「人間じゃない」ということであり、対等かつ平等な人として法の下に平等に生きることを否定している。

社会の構成員である人々は、自己の歴史の一つとして出自、性向、民族などの属性を有しており、これに基づいて人格形成をし、自らのアイデンティティを形成・確保する。一定の属性を有する人々一般にむけられたヘイト・スピーチでは、表層的には、人格権の否定（自分が人間としての自分であることを否定される）そして生存権の否定（対等な人間として生き

る権利・法の下において平等であることを否定される）が問題になる。しかし、その実態としては、特定の属性をもつ人々が生きながらして人格権・生存権を否定されながら生き続けるという意味において、その侵害は継続している状態にある。ここでは、不平等、つまり、個人を特定できないということではなく、公共の場において一定の属性に向けて侮辱的発言をすることで「民主主義社会における根本基盤である対等に平等に生きること」（＝社会的平等）を否定している。

子どもに対する

厳しいしつけや指導

龍谷大学文学部哲学科教育学専攻教授 林 美輝

街中で、子どもが保護者らしき人に大声で叱りつけられている様子を見て心が痛む経験をしたことのある人も多いのではないだろうか。私は仕事柄、訪れる先の学校やその他の教育現場でも同じような経験をします。時々とはいえ、先生も大声でなく、丁寧な言葉遣いではありますが、子どもが聞けば従わざるを得なくなるような口調で話している様子を見て、見ているこちら側も辛くなることがあります。

家庭よりもさらに時間的な制限がある中で教育活動ですし、とりわけ緊急時にはそうせざるを得ない場合があるのだと思います。

体罰を伴うものではなくても、口頭等によるこういった厳しいしつけや指導は、よほどの暴言やハラスメントが伴うものでなければ問題視されることは少ないと思います。しかし、こういう指導やしつけは、「教育」というものを「自律」した人間の育成だと理解した場合には、体罰と変わらないとも言える側面があります。体罰が、相手の肉体に暴力を与えることで、「教育」する側の思い通りにするのと同様に、体罰を伴わない口頭等による厳しいしつけや指導も、相手の心にある心的ストレスを与えることで、「教育」する側の思い通りにしているだけなのであれば、その点においては体罰と変わらないと言いうこともできます。本人はもちろんのこと傍らに他の子どもにも心の傷を与えることがあるでしょう。

しかもそういつたしつけや指導には、子どもの「理性」的な納得を伴っていない場合も多いのではないのでしょうか。真剣だからこそ熱が入り、相手の「心」に響く、という文化のようなものを少なくない割合の人たちが支持していることもあると思います。時には子どもの心に「感動」も生じて、行動が変わることもあるでしょう（ある種の体罰も感動的な美談で語られることがあります）。しかし、それだけならば、変化した子どもの行動が「主体的」なものであると言えても、そ

の子の「自律」した判断によるものとも言えないのではないのでしょうか。

街中で子どもを大声で叱っていた保護者らしき人も、子どもが従わざるを得ない口調で話している先生も、そんなことは分かっているのかも知れません。もしも子どもとじっくり向かい合って話し合う時間がないから、そういうしつけや指導をされるのだとすれば、どうすれば時間の余裕ができるのかということを考えていく必要があると思いますし、また、他にも何か環境を改善することでこういった問題を克服することができるとも知れません。そのことはきっと、体罰もなく、子どもの権利を擁護するような環境づくりにもつながることでしょう。

介護が必要でも

その人らしく生活する権利を

龍谷大学社会学部准教授 高松智画

厚生労働省の「平成29年簡易生命表」によると、わが国の「男の平均寿命は81・09年、女の平均寿命は87・26年」で、世界でもトップクラスの長寿国です。近年は、健康

寿命（日常生活に制限のない期間）をできるだけ伸ばして、平均寿命との差を縮めることが重視されており、食事や運動などについて、日頃から健康な生活習慣作りに取り組むことが大切であるとされています。しかし、とくに高齢になると、病気やケガだけでなく、体の老化によって、健康を維持することがより困難になっていきます。

介護保険制度は、食事や入浴、排泄など身のまわりのサポートが必要な人が、適切なサービスを受けることができよう社会全体で支え合うことを目的としています。介護保険サービスを受けるためには、どの程度の介護が必要なのかの認定を受けることになっています。2016年度末の厚生労働省の報告では、介護保険加入者のうち「要介護1」～「要介護5」の認定を受けた高齢者の占める割合は13・0%（445万9千人）です。日常生活全般に亘って介護を必要とする「寝たきり」、あるいはそれに近い状態の「要介護4」「要介護5」と認定された人は、そのうち44・6%（133万3千人）になっています。

私は、そうした介護を必要とする高齢者のための介護保険施設の一つである、特別養護老人ホームを月に1～2回訪問しています。施設を運営する社会福祉法人の苦情解決のための第三者委員として、入所者から、日頃困っていることはいか、要望はないかを聞き取る活動をしています。会話の中で、「お世話になっているのでこれ以上望むことはない」と

いう言葉をよく耳にしますが、本当に今の生活に満足しているのか、遠慮しているのではないかと思うのです。また、「これ以上長生きしてもしかたがない」といった言葉を聞くこともあります。人の手を借りなければ生きていけないことのつらさ、苦しみを思うと返す言葉がみつからないこともあります。

先に示したように、健康で長生きすることを願ってもできない現実があります。健康寿命の延伸ばかりに目を向けていると、介護を要する高齢者が生きづらさを感じていることに気づけなくなるのではないのでしょうか。介護が必要であってもなくても、誰にでもその人らしく生きる権利があり、それが尊重されなければなりません。

障がいのある人と 共に生きるために

障がい学生支援室長 森田 喜治

障がいと名付けられているものはなんなのか、障がいとは何をそう呼ぶのでしょうか。それぞれの人にそれぞれの個性があります。だれもが身体の特徴を持ち、機能の特徴を持ち、

心の特徴を持っていての中で、環境や制度や慣行などの社会的な障壁によって日常生活や社会生活に不便や生きづらさを感じている人のことを「障がい者」と言います。障がい者の多くは、自立した生活のために、それぞれの状況に応じて補装具を用い、あるいは援助を受けて困難の改善を図っています。だれもが人間らしく生活することは、ごく当たり前の姿ですが、障がいと名付けられると何か特殊なもののように思えてきます。それは私たちの心にその状態を何か特別なものにせねばならない仕切りがあるからではないでしょうか。社会的障壁とは、他ならぬ私自身の中にもあると言えるのかもしれませんが。

人は人とのつながりの中でそれぞれの特性を理解しつつ関わりを持ちます。困っている人を見つけたら声をかけあう勇気を持つことが、理解への一歩につながります。ユニバーサルデザイン化やバリアフリー化などにより、予想される困難を解消することも理解のひとつです。人はそれぞれ違った存在であることは、誰しも同じなのです。心様々な色合いの中で、お互いが、お互いを認め合いつつ共に生きていくためには、人に対する限らない興味と理解が必要なのではないでしょうか。コミュニケーションが希薄になったといわれる昨今、特に現代では他者に対する理解や関心が減少し、それぞれの個性を否定するような様相が見られます。

共に生きるために必要な最低限度の理解を人と人とののかか

わりの中で見出していくとき、私たちは大切な絆をつくっていきます。

何か特別なことを求めるのではなく、さまざまな状況におかれている人が分け隔てなく相手を理解しようとするところに、差別の解消があるのでしょうか。自分の隣人は私の援助者であり、また私は隣人の援助者でもあるということを、障がいという個性に対して支援者としてかわるときにも、私たちは自分自身の心に留めておく必要があるのかもしれませんが。

「障害者差別解消法」では、大学や事業所に対し「社会的障壁を取り除くために必要で合理的な配慮を行う」ことを求めています。合理的な配慮とは、もともと私たちが社会生活の中で培ってきた精神でもあります。私たち一人ひとりが、お互いに言葉を掛け合う関係を見つめ直すことから始めませんか。

人権に関する基本方針（2016年6月23日策定）

人権に関する基本方針の策定にあたって

建学の精神と人権

龍谷大学は、親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間の育成を願い、教育と研究を行っています。それは、心身を苦しめる迷いから逃れられず、自分のみを善しとするものの見方から離れ、阿弥陀仏の願いに生かされて自と他が互いに深い縁で結ばれていることに気づかされる生き方として、建学の精神に謳われています。

本学では、その具現化の方策の一環として、1961年に人権に関する授業科目を開講して以来、人権教育、人権研究、人権啓発などを通じて人権尊重の文化の醸成を推進してきました。しかし、一般社会では既知の人権問題に加え、これまで認識されてこなかったさまざまな人権問題が表面化していま

す。私たちは、これらの人権問題に迅速に対応し、建学の精神にもとづき、他者への同朋としての温かい眼差しと、生かされ恵まれている喜びを持つことのできる人間教育に全学をあげて取り組まなければなりません。

身近な人権課題に向きあう視点

本学は、2万人を超える学生や教職員のほか、さまざまな関係者によって構成されています。言い換えれば、人種、民族、国籍、ルーツ、宗教、信条、社会的立場、年齢、性別、セクシュアリティ、障がいの有無など、多様な人が、自由に学び、働き、行動し、交流するコミュニティであるといえます。一人ひとりのつながりによって成り立っているコミュニティにおいて、差別し排除しようとすることは、人であることを否定することです。

残念ながら、身近な社会においてさまざまな人権侵害があとを絶ちません。例を挙げると、学校でのいじめ、インターネットでの誹謗中傷、職場でのハラスメント、家庭での暴力（DV）、子ども虐待、さらには街頭でのヘイトスピーチなどがあります。さまざまな人権侵害を克服するためには、加害者だけの問題として済ませるのではなく、加害者を取り巻く社会構造や背景、つまり社会が抱える問題認識とそれらを解決するための取り組みが欠かせません。

人権の問題や差別は、意図的な行為だけでなく、無意識の

うちに自己中心の見方によって引き起こされることにも注意を向ける必要があるでしょう。たとえば、人の個性は一人ひとり違っていて、性のあり方も多様です。その理解が不十分で、画一的な観念や固定的な性別役割に囚われていると、知らず知らずのうちに相手を傷つけることがあります。無知や無関心、そして多数者への迎合による「無意識の差別」についても、その自覚と克服の努力が必要でしょう。

人権を考える理念

1948年の国連総会で、すべての人間の自由と尊厳と権利の平等を謳った「世界人権宣言」が採択されました。1966年には、加盟国を法的に拘束する「国際人権規約」が採択され（日本は1979年に批准）、その後も、「人種差別撤廃条約」（1965年）や「女性差別撤廃条約」（1979年）、子どもの権利条約」（1989年）、「障害者権利条約」（2006年）など個別的な人権条約が採択されています。

また、「日本国憲法」は、「すべて国民は個人として尊重される」（13条）と定め、個人の生は国家や他者の道具ではなく、自分らしく生きること自体に価値があることを認めています。さらに、アジア太平洋戦争の加害と被害の経験から、平和的生存権を掲げ、個人の尊厳を平和と一体のものとしています。人権の理念は、すべての人が自分の生き方を主体的に描き、自己成長をめざして協働し、社会参画するパワーを輝かそう

とするものです。また、だれも排除しない、個人の尊厳を大切にする社会、多様な価値観を尊重し、固有性を活かしかう社会を目指すことにあります。

見えにくい差別に対しても鋭敏な感覚を醸成し、自己を平等に見ようとする眼差しを涵養することが、私たちの責務です。一人ひとりの力は弱くても、より良く変えていこうと努める姿勢を示し続けることこそ、人権が尊重される社会に向けた最も重要な実現過程だといえます。

本学は、すべての人が平和に共存し、連帯する社会を目指して、ここに「人権に関する基本方針」を策定します。

人権に関する基本方針

龍谷大学は、建学の精神である浄土真宗の精神を具現化する取り組みのもと、平和を希求し、基本的人権と生命の尊厳を守り、人種、民族、国籍、ルーツ、宗教、信条、社会的立場、年齢、性別、セクシュアリティ、障がいの有無などにかかわらず、本学に関わるすべての人が差別やハラスメントなどの人権侵害を受けることなく学び、働き、関わり合えることを保障します。

龍谷大学は、基本的人権を尊重した環境の整備と、社会的に不利な立場にある人への支援・連帯を推進するため、人権理論の研究、社会的な変化や新たな人権問題に関し、情報収集に努め、本学における人権保障にかかる諸施策の検証と改善、教職員への研修、学生への教育・啓発を継続的に実施します。また、人権保障のための体制の整備に努め、取り組みを公表します。

龍谷大学のすべての構成員は、人権侵害が意図的な行為だけでなく無知や無関心、想像力の欠如によって生じることを常に意識するよう努めます。そして、自ら差別に加担し他者を傷つけている可能性があることの自覚をもち、人権問題に真摯に取り組む姿勢を持つとともに、一人ひとりの多様性と価値を尊重し、偏見や固定観念、差別意識の克服に向けて、主体的に取り組みます。

龍谷大学および龍谷大学のすべての構成員は、教育、研究など、あらゆる機会において人権保障にかかる諸課題を明らかにし、諸活動や成果の発信を通して、人権を尊重する文化と差別のない社会づくりに貢献します。

性のあり方の多様性に関する基本指針

(2017年12月8日 公表)

性的指向や性自認など、性のあり方は多様であり、これらに関する差別や偏見を解消し誰もが自分らしく安心して過ごすことができる大学や社会を目指すことは、すべての本学構成員が取り組むべき課題です。

龍谷大学は、「人権に関する基本方針」のもと、本学構成員の一人ひとりが、性的指向および性自認などに関する悩みや生きづらさを抱える人がいることを常に理解し、合理的な配慮を可能な限り提供するため、次のとおり基本指針を策定します。

1. 教育、学修、研究、就業等の環境において、性のあり方に関する偏見や差別が生じることがないように不断の学習と啓発に努めます。
2. 具体的な対応にあたっては、悩みや生きづらさを抱える本人の意思を尊重して合意形成を目指します。
3. トイレや更衣室等の利用にあたり、戸籍上の性別等にかかわらず性自認にしたがって自らが選択できるよう、環境整備と理解の醸成を図ります。
4. 性のあり方に関する個人情報保護を徹底します。



「白色白光」

「白色白光」びやくしやくという言葉は『仏説阿弥陀経』に「池中蓮華 大如車輪 青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光 微妙香潔」とあり、本紙の表題にふさわしいということで命名しました。

これを口語訳しますと、次のようになります。

池の中に咲く蓮の花は、車輪の如く大きい。例えば青い色の花は、青く光り輝いており、黄色い花は黄色く光っている。赤い色の花は、赤く輝いて咲き匂い、白い色の花は、真つ白に輝いて咲いている。その各々の花は、微妙であり、妙なる色合いであり、その香りたるや、芳しく清らかである。

世の中には、青い色の花として輝く人もあるでしょうし、あるいは白い色で輝く人もあるでしょう。このように、私たち一人一人は、それぞれの母の胎内から生まれ、尊い生命を恵まれた、かけがえない存在なのです。

「白色白光」には、お互いがお互いを尊重しあいながら、自分だけにしか出せない美しい輝きでもって咲き匂って欲しいという願いが込められています。

「白色白光」第21号

2019年3月1日発行

編集 龍谷大学人権問題研究委員会

発行 龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

☎075(642)1111(代)



RYUKOKU
UNIVERSITY